

ガンディー亡き後のサルヴォダヤ運動

——J. P. ナーラーヤンによる「全面革命」運動の 歴史的意義——

林 明

序論

1974年から75年にかけて、ビハール州を中心にしてインド各地では、J. P. (= ジャヤプラカーシュ)ナーラーヤン(1902~79)による「全面革命(Total Revolution)」と呼ばれる運動が展開された。この運動は、人間自体を変えていくという独特な理論と実践において、また、政治的には、インド独立以来一貫して政権を握ってきた会議派政府を崩壊へと導いた点において、非常に注目される運動であった。

従来、「全面革命」運動によりジャナタ政権成立へと導いたナーラーヤンの役割は、インドの民主主義を護ったという点で一般に評価されてきたが、人間を変革しようという「全面革命」の思想そのものは、空想的な思想であるとされ、否定的な評価が下されることが多かった。それに対し、筆者は、ナーラーヤンが「全面革命」の思想を打ち出すに至った内的な論理を重視することにより、この思想を捉え直し、「全面革命」運動を理解しようとするものである。なぜならば、ナーラーヤンは、「全面革命」運動を、マハートマ・ガンディー(1869~1948)からヴィノバ・バーヴェー(1895~1982)へと受け継がれた「サルヴォダヤ(全ての者の向上)運動」の延長線上に位置付けており、そのようなインド社会の文脈において初めて理解できる部分も多いからである。また、それによってサルヴォダヤ運動の再評価も可能になると考えられる。

本稿の目的は、以上のように運動の内的な視点を重視しつつ、「全面革命」運動の思想的特徴、戦術、理念の実践等を明らかにし、その歴史的意義を探ることにある。

なお、筆者は、1988年3月に、ビハール州でこの運動に加わった人々へのインタビュー調査を行うと同時に、運動当時に歌われたヒンディー語の歌を収録することができた。本稿では、そういったフィールドワークの成果も活用していきたい。

I. ナーラーヤンの思想的変遷

ナーラーヤンの思想は、社会主義思想からサルヴォダヤ(全ての者の向上、の意味。後述)思想へと変遷した。また、サルヴォダヤ思想においても、ヴィノバの考えに則ったそれから、ナーラーヤン独自の考えに則ったそれ、即ち、「全面革命」思想へと変遷した。そのように見るとナーラーヤンの思想は、表面的には時代により大きく変化したように見えるが、ナーラーヤンが次のように述べているように、ナーラーヤンの中では、思想的立場は一貫していた。

部外者には、私のこれまでの人生航路は、紆余曲折して定まるところがなく、手探りの状態を続けていたように見えるかもしれない。だが、我が身を改めて振り返ってみるに、そこには一貫した流れがあったといえる。手探り状態を続けたことは、否定しようもない事実であるが、それは、盲目的なものではなく、明確な方向性を持ったものであり、そうであったからこそ、私は困難な道をこれまで歩んでくることができたのであった¹⁾。

本章では、ナーラーヤンの思想的変遷を辿りながら、その思想的特徴を考察することにした。

ナーラーヤンは、1902年10月11日ビハール州チャプラ県シタブディヤラ村で生まれた。ナーラーヤンは、青年期を迎えると彼と同時代の若者と同じように、ガンディーの導くインド独立運動に関心を向けていった。即ち、ナーラーヤンは以下のように述べている。

少年の頃は、当時の多くの少年と同じように、私は熱烈なナショナリストであり、その頃ベンガルで起きていた運動に惹き付けられた。しかし、同時に(ガンディーの)南アフリカのサティヤグラハの話は私の若い心を魅了した。私の革命思想が成熟する以前に、ガンディーの非協力運動はハリケーンのようにインドを覆った。私も嵐の中の葉のように空に舞い上げられた当時の何千という若者の一人だった。(ガンディーの)偉大な思想の風とともに舞い上がった経験は当時の私の内面に痕跡を残した²⁾。

更に、ナーラーヤンは、1920年から22年にかけてのガンディーによる非協力運動の時期、ガンディーの呼び掛けに応え、政庁によって維持されていたパトナ大学を去ることにした。そして、このような中で、ナーラーヤンにとっては「自由(freedom)」が彼の前半生における大きな目標となったのである。だが、この時既にナーラーヤンにとって「自由」は、次のようにインドがイギリスから自由になることのみを意味していたのではなかったことが注目される。

「自由」が私の生涯の大きな目標となったのはその時であり、それは今日まで続いている。「自由」の意味は、年月の経過とともに、単に我が国が自由になることを超えて、すべての地域における人間のあらゆる障害からの自由——ことに精神の自由——を包摂するようになった。そして、「自由」は私の人生を突き動かす力となり、パン、権力、治安、繁栄、国家の栄光、その他何物のためにも妥協できないものとなった³⁾。

ナーラーヤンは、大学を去りはしたものの、大学での教育を受けたいという望みは強く残っていた。彼は、1922年から29年の間アメリカの大学で勉強することになった。ヴィスコンシ

ン大学で勉強している時、ナーラーヤンは、何人かの коммуニストの学生らと親しくなり熱心にマルクスやその後継者の著作を読み、熱烈なマルクス主義者になった。自由は彼の目的であり続けてはいたもののマルクスによる革命の方法は、ガンディーの市民的不服従や非協力の方法より確かなものに思われるようになった。レーニンの目を見張るような成功もマルクスの方法の優越さを示しているように見えた。ここで注目されるのは、ナーラーヤンが次のようにマルクス主義の人間主義的な価値に引かれていた点である。

マルクス主義が私に投げ掛けたもう一つの光は、平等と友愛であった。... その時私は、自由の理想と同じくらい私を魅了した平等の問題に関するガンディーの立場をあまりよく知らなかった。... 私はその頃は、ガンディーが彼独自の社会改革の概念とそれを達成するための手段を持っていることを理解していなかった⁴⁾。

さて 1928 年第 6 回コミンテルン大会で、植民地諸国における共産党は民族運動に協力しないようにとの方針が打ち出された時、インド共産党はこれに従った。熱烈なナショナリストであるナーラーヤンは、この方針にショックを受け、そのような方針はマルクス主義の原則をインドの状況に誤って適用したものであるといった⁵⁾。そして 1930 年塩の行進が始まり、ナーラーヤンはこの運動に全力で参加した。ナーラーヤンは、この時インド共産党が参加していないことに失望した。

私は、この戦線のどこにおいてもインド共産党員を見出だすことができなかった。... さらに悪いことに彼らは、ガンディーをインドブルジョワジーの手先として非難していきことに気が付いた。... インドの共産党 (CPI) 員は、スターリンの指導下にあったコミンテルンの政策に従っているに過ぎなかった。... そのような CPI との相違が、私にとってそれまで共産主義の徳を体現する見本であったソヴィエト・ロシアからのイデオロジカルな乖離の始まりであった。またロシアでこの時期に先立つ数年前から起こっていた権力闘争は私に悪印象を与えた。... マルクス主義の考えからして、ソヴィエトの独裁的な政策は承諾できなかった⁶⁾。

このような過程を経てナーラーヤンは、民族運動を担っている会議派の中にいて真の社会主義を目指そうとして 1934 年 5 月、会議派社会党を創立した。

会議派社会党は、二つの目的を持っている。第一の目的は、国民会議派のそれと同じ(筆者注: インド独立)である。第二の目的は、独立インドは社会主義の基礎の上に立つ経済生活を受け入れなければならないことである。... 外国支配が終わっても、インドの貧困の問題を自動的に解決することはないであろうし、多数の人々の搾取をなくすることもないであろう⁷⁾。

私にとって、自由インドは社会主義インド、貧しく虐げられた人々のスワラージを意味していた。この点に関する会議派の政策は、あいまいで不十分に思われた。... 私たちは、民族独立の運動がより革命的に推移するように、即ち、大衆の経済的・社会的解放と結び付くように会議派社会党を創立した⁸⁾。

さて、1940年代に入りナーラーヤンはクイットインド運動に加わるなどして、更に独立への戦いに飛び込んでいったが、インドは1947年ついに独立することになった。独立後、ナーラーヤンはインドの社会主義運動を指導すべく活動を始めた⁹⁾。48年マハーラーシュトラ州のナースィクで開かれた社会党の第六次年次総会では、独立という目的を達成した以上はもはや会議派にとどまる必要はないとの判断から、社会党の会議派からの離脱も決定された。そして独立後の最初の総選挙が、1952年に行われることになった。だが、ナーラーヤンの精力的な選挙運動にもかかわらず、社会党は大敗を喫してしまった。社会党は、得票率こそ会議派に次いでいたが、候補者を乱立させたため、僅かに12議席を得たにとどまったのであった¹⁰⁾。他方、ナーラーヤンは、政党政治の実態を見るにつれ、政党政治では、人民の精神的自立をもたすことはできないと感じ、幻滅し始めるようになっていった。

権力闘争の問題を生来含んでいる政党システムは、私をますます当惑させた。私は、お金、様々な組織、宣伝部隊等によって支えられた諸政党がいかにして人々の上にのしかかってくるのか、人民の統治がいかにして政党の統治になるのか、政党の統治がいかにしてその政党の中の派閥の統治になるのか、民主主義がいかにして単に票を投じる行為へと変質するのか、この票を投じる行為さえも強力な政党だけが候補者を立てることのできるシステムによりいかに投票者の選択の幅が狭められるのかを見てきた。

政党政治は、人民の力や主導権を発揮させるようには、そして人民の自立・自治を助けるようには機能しなかった。政党のすべての関心事は、権力を奪取することであった。…民主社会主義者は、権力の分散化を説いてはいたが、実際には彼らの関心事は、権力の奪取であった。彼らは、権力の分散化は、中央での権力を奪取した後でのみ可能であると信じているようであるが、彼らは、この手順の自家撞着がわかっていない。分散化は、自立の力が失われた人々に上から可能にすることはできない。…人間の進化の試金石は、外からの何らの制約なしに、人間がお互いに仲良く誠実に協力して生きる能力である。それが人間や社会の問題が、本質的には道德の問題であると見做した理由である。…ブルジョワ国家は、政治権力を独占した。社会主義国家は、それに経済権力の独占を加えるおそれがある。…私が考え付いた唯一の方法は、私を政治から更に遠ざけサルヴォダヤへと向かわせることであった¹¹⁾。

こうして1954年にナーラーヤンの思想はサルヴォダヤ思想へと行き着いた(「サルヴォダヤ」の意味それ自体は、本章冒頭で述べたように、「全ての者の向上」という意味である。マハートマ・ガンディーは、1921年、『建設的プログラム(Constructive Programme)¹²⁾』を提示し、そこから、人間の内面変革、社会改革を目指した運動¹³⁾が始まったが、その運動がサルヴォダヤ運動と呼ばれるものである。サルヴォダヤ運動は、ガンディーの没後、ヴィノバに受け継がれ、ヴィノバは、1951年から、「ブーダーン(土地寄進)運動¹⁴⁾」、「グラームダーン(村の布施)運動¹⁵⁾」を始めた)。ソ連でのスターリン時代の粛正の事実が明らかになってきたこと、ナーラーヤンとネルーとの関係がよいことを社会党員に妬まれたこと、インド共産党員がその党の中においてさえ理想的な関係をつくることができていないこと、こういったこともナーラーヤンの考え方に影響を与えた。ナーラーヤンは、人間自身が変わること、人と人との関係が変わるこ

とが最も大事なことであるという思考方法を取ったのである。ナーラーヤン自身、ヴィノバが1951年に始めたブーダーン(土地寄進)運動、グラームダーン(村の布施)運動に加わってみて民衆からの反響の大きさに驚くと同時に、人間の内面変革を特徴とするこの運動に以下のように大きな感銘を受けた。

UP州のハミルプール県のマングロース村で、グラームダーンが宣言された。...その革命は何と美しく、その他の革命と何と違っていたことか！他の国では、土地の私的所有権は、法の強制や直接的な物理的暴力によって廃止された。この革命の社会的結果は、苦痛と憎悪、悲惨と横暴、農政官僚の成長と自由農民の奴隷化、権力の集中と独裁のように一様にして不幸なものであった。グラームダーンの美しい革命においては、所有権は力によって廃止されるかわりに共同体に自由に引き渡された。外見の社会変化に内的な人間の変化(inward human change)が付き従っていた。それは、ガンディーが‘二重革命(double revolution)’(筆者注：内面変革とそれに伴う社会改革)という言葉によって意味したところのものの例であった。社会的緊張、衝突、横暴のかわりに、自由、双方の善意、同意があり、集団で自由に主導権を発揮したりするような前例のない効果を生み出すことを可能にした。(マングロースでの穀物生産が4年間余りの間に3倍になったということは、注目に値する¹⁶⁾。)

ナーラーヤンは、1954年ボードガヤでのサルヴォダヤ大会でサルヴォダヤのためにジーヴァンダーン(自分の人生を捧げる)ことをすると宣言した。そしてこの大会のすぐあとで、ナーラーヤンはナワダ県にあるソーコーデオラという村にアーシュラムを建ててサルヴォダヤ運動を広め始めた。

だが、ヴィノバの運動は、1960年代の末頃になると、以下の理由で形骸化してしまった。

即ち、第一に、地主によって分け与えられた土地は、荒れ地が多く、耕作が困難なところが多かったことである。

第二には、ヴィノバのブーダーン、グラームダーン運動は、より大衆に訴えかけていくために、スラブ・グラームダーン(単純化されたグラームダーン)運動へと変化したことである。これは、土地を譲った者がその土地に関する95%以上の世襲権を保持することができるというものであった。ブーダーン、グラームダーン村落の数を増やすことのみに運動の焦点が絞られた結果、運動は、実体の伴わないものになってしまった。因にナーラーヤンは、ヴィノバのこの考え方に反対であり、現存するグラームダーン村を他の村々の手本となるような模範村へと発展させる努力の方をするべきであるという意見であった。更にヴィノバは、1965年にビハールでスラブ・グラームダーン・トゥーフアーン(嵐)運動を起こした。これは、村がグラームダーン村であると宣言すればいいというものであった。1969年までにビハールの大部分の村々がグラムダーンであるとの誓約をしたので、サルヴァ・セーヴァ・サング(Sarva Seva Sangh 全インド奉仕協会¹⁷⁾)はビハールダーン(ビハール州の布施)を達成したと宣言した¹⁸⁾。しかし、これが茶番でしかなかったことは明らかである。地主—小作人の関係等ほとんど変わらずグラームダーンは形式だけのものになってしまった。権力を持つ側である地主とそれによって支

えられている国家との対決を避けているヴィノバの運動には限界があった¹⁹⁾。ナーラーヤンは、次のように記している。

ヴィノバは、数年間は奇跡的なことをした。ガンディー流の新しい社会変化と再建が進行するように思われた。だが、彼の嵐のようなブーダーンの実験の後には、グラームダーン、グラーム・スワラージヤ(村落自治)、その他の建設的実験の力強い“嵐”は言うまでもなく、そよ風すら吹かなかった。後に彼は、自己の内面の生活に引き籠もり、「不活動」という形の「活動」の実験を始めた。今日まで、この活動が実を結んだようには思えない。しかし、歴史の中における10年や20年という期間は何なのであろうか。一方、国は精神的のみならず、貧困線以下の状態で住むインドの人間が少なくとも40%いるような経済的、社会的、文化的な凋落に向かって突き進んでいる。ここで、バプー(筆者注 マハートマ・ガンディーの愛称)が民主主義を定義して言った次の言葉、即ち、民主主義は、人民の投票によって政府が作られることだけではなく、人民がその政府は支配するに値しないと判断した時にはそれをやめさせることができることを意味するという言葉を思い出す²⁰⁾。...ピラミッド型の政治構造がいまなお最盛期にある。同じことが、教育やその他ほとんどすべての公共の活動の分野に当てはまる。それは、筆舌に尽くし難い悲劇的な物語である²¹⁾。

こうして、ナーラーヤンは、沈滞しつつあったサルヴォダヤ運動を立て直すため、新戦略考案に時間を費やし始めた。以上からすれば、ブーダーン・グラームダーン運動の体験をナーラーヤンが総括する中から出てきた、新たなサルヴォダヤ運動の形態が「全面革命」という位置付けができるよう。

ナーラーヤンは次のように記している。

独立以来28年経ったが我々の社会の政治・社会・経済構造に本当の変化はなかった。ザミンダール制度は廃止され、土地改革法が通過し、不可触民制は法的に禁じられもした。しかし、インドの大部分の村は、未だに高カーストや大地主の手に握られている。小地主、土地のない者、バックワードクラス及びハリジャン——こういった者たちがほとんどの州の大抵の村々の絶対多数、多分インドの10分の9を形成している。それにもかかわらず彼らは依然悲惨な状況にある。ハリジャンは未だ生きながら焼かれている。...

幾つかの産業、銀行、生命保険が国有化された。鉄道は大分昔に国有化された。新しい大規模な公共部門の産業が設立された。しかし、これらのすべては国家資本主義、非効率、浪費、汚職につながる。国家資本主義は、国家、特に国家官僚(State Bureaucracy) 或いはガルブレイスが適切に表現している国家官僚(Public Bureaucracy)により多くの権力を与えることを意味する。そこには社会主義の何らの要素或いは痕跡もない。そこには労働者階級と大衆は、労働者もしくは消費者として以外の立場はない。そこには多く語られている「経済的民主主義」も、産業の民主主義もない。しかしこのことは私が社会主義に反対していることを意味してはいない。私がそのように指摘するのは、私が社会主義に深い関心を持っているからである。我が国の社会主義者たちの多くが、社会主義と国有化を同義語にしているのは遺憾である。

幾つかの委員会が設置されているにもかかわらず、教育制度は基本的には英国統治時代のまま、即ち、一番上にまで到達するエスカレーターのように作られている学級制教育にと

どまっている。...

慣習、生活様式、迷信、これらすべてのものが、大衆の間にはほぼ昔のままに残っている。...結婚の慣習、特にビハール、ベンガル、UP その他数州で支配的なティラク²²⁾とダヘーズ²³⁾の慣習を例に取ってみよう。この悪習は法律で罰する努力が行われたが、死文化している。一方、この病害は急速に広がり、多くの家族を崩壊させ、多くの女性の人生を破滅に陥れている。それまではこのような悪習のなかった階級までが、社会的悪習なるものが地位の象徴であるかのように見えるという理由で、急速にその餌食になり始めている。...

それらすべての問題に対処するためには、大衆が目覚め、大衆闘争を行うことが必要である。...即ち、社会のあらゆる面での革命、全面革命を行うことが必要である²⁴⁾。

因に、「全面革命」の骨組みはナーラーヤンの記すところによれば以下のようなものである。

(1) 道義的・精神的骨組み

① 人間は物質的かつ精神的である。人間の生命は物質的要求と精神的要求が同時に満たされなくてはならない。

② 物質的要求は食物、衣服、住居等で満たされなくてはならない。食物は適量で、質素でかつ栄養価に富み、味覚あるものでなくてはならないが、過多であってはならない。衣服は実用的であるのみならず、見た目もよく、肌ざわりもいいものであるべきである。衣服はまたどのような気候にも十分に合わなくてはならないが、多すぎても、流行を追っても、無駄にしてもいけない。衣服の原材料は(出来る限り)有機物質であって、無機質もしくは合成物質でない方がいい。住居は簡素で(健康的な通気、日照等が保証された)人間の生活に適したものであるべきであるが、広い見え通りの住居は慎むべきである。贅沢な生活は奨励されない。「贅沢」は相対的な言葉であり、それは、社会的必要性と一般的水準との関連において見るべきである。

他の物質的要求についても同様である。このことは、消費の自発的制限を意味し、それは道義的概念である。私は禁欲主義という考え方はしていない。禁欲主義は精神修養者の追求することである。一般の人、私たちすべてにとっては、精神的極致または精神的目的として禁欲主義を受け入れる人たちを除けば、物質的満足が完全に得られることが精神生活そのものである。過剰な欲求、行き過ぎ、富を追求する不正な手段、これらすべては反精神的行為である。

(2) 経済的骨組み

経済発展の目的は人間である。すべての成人の仕事を与えること、最低限の生活水準を保証することが必要である。

多分インドでは、私たちは大規模で近代的な技術、資本集約的な産業を十分持っている。私たちは国防上必要なものを除き、それらの成長を計算ずくで停止するよう求めてもいいのではないであろうか。人工衛星の開発のように資金がかかり、見えどろで役に立たない、いわゆる威信を追求し、他の真似をするような事業は放棄されるべきである。...私は、科学の遅れ

を求めているのではなく、インドの与えられた条件及び国民の必要からみて、彼らの幸福に直接つながるような、科学の応用を求めているのである。

産業開発は従って、中小の産業と地方の産業の発展を図るという方針を取るべきである。地方と小規模な産業に役立てるには技術の向上が必要である。適正技術 (Appropriate Technology) の開発には、重点的な、問題に応じた基礎研究が取り上げられ、進められるべきである。地方の学校は、実践的かつ理論的で、地域の実践と必要に関連した、村落技術学課を持つべきである²⁵⁾。

ナーラーヤンの思想的特徴に関し以上を通していえることは、次の四点である。第一は、民族運動に積極的に参加しようとしなかったインド共産党批判、また各国の共産党に対しそのような命令を出したコミンテルン批判に表れているように、社会主義運動に共鳴していたとはいえ、あくまでナショナリストとしての立場が貫かれていた点である。第二は、自由・平等・友愛といった理念、即ち、精神的、内面的な問題を重視していた点である。ナーラーヤンが社会主義思想に惹かれたのも社会主義思想がそうした理念を標榜していた点にあった。ナーラーヤンが終にはサルヴォダヤ思想に辿り着いたのは、そうした理念を標榜していたはずの社会主義国家内において理念の実現とは程遠い現実が明らかになってきたこと、社会主義を標榜している政党内においてさえそうした理念が実践されていなかったことへの失望があった。第三は、政党政治に対する見解に表れているように、権力政治を批判し、いわば、下からの草の根民主主義といったものを説いていた点である。後年の社会主義国家批判はこの点と関連していた。第四は、科学の応用に当たっては、与えられたインドの条件と、国民の必要とするものから見て、彼らの幸福と直接関係のあるものに限定すべきである、或いは産業の開発は中小の産業と村落の産業の発展を図るべきであると主張していることに表れているように、大規模な経済発展政策に異を唱え、等身大で安上がりの、地域の生活に密着した経済のあり方を模索している点であり、この点ガンディーがチャルカー運動が打ち出した発想と同じであるといえよう。

総じてナーラーヤンの思想は、人間の内面的、精神的な問題を重視しながら社会変革を行っていこうという思想であり、詰まる所ガンディーの考え方の系譜を継ぐものとなっている。但し、ナーラーヤンには、ガンディーやヴィノバのように宗教的、神秘的な趣がなく、彼はあくまで経験と試行錯誤により理詰めでその思想を形成していったということがいえるであろう。

II. 「全面革命」運動の展開

「全面革命」運動は、第I章で述べたように、1960年代末頃には既に形骸化し、力を失っていたサルヴォダヤ運動を立て直し、活力のある新しいサルヴォダヤ運動を起こしていこうとした流れの中において位置付けることができるが、同時に1970年代になってから広がり始めた反政府運動の流れの中においても位置付けなければならない。即ち、1970年代に入ると、インド各地で大衆運動が盛り上がりを見せるのであるが、その背景には、以下のような会議派政治の腐敗、独裁政治の強化、経済政策の失敗があった。

例えば、1971年5月の国内治安維持法の公布である。それは、公共の秩序を破壊し国の安全をそこなう恐れのある人物を、裁判なしで一年間拘禁できる権限を中央政府と州政府に与えるものであった。また、1972年初めに行われた州選挙は不正選挙であったといわれている。西ベンガルを例にとれば、投票所は与党会議派と共産党（CPI）からなる武装団により占拠され、投票管理人が投票所から追い出されたりした。

更に1973年4月25日、政府は従来の慣例を破り、最高裁判所の三人の有資格年長判事を飛び越えて、親政府的な立場をとっていたライ判事を最高裁長官に任命した。因に、三人の有資格判事は反政府的な立場をとっていた。これは司法権への重大な侵害であった。なお、インディラ・ガンディー（1917-84）首相は首相への権力を大幅に集中し、内閣人事はもちろんのこと、会議派の運営委員会委員、州会議派政府首相人事に直接介入する等のことも行った²⁶⁾。

経済政策に関して言えば、1969年に始められた第四次五カ年計画が、バングラデーシュ独立に絡む難民のベンガル流入、モンスーンの不順による食糧生産の停滞に加えて、1973年秋から吹き荒れた世界的エネルギー危機によってあえなく挫折していた²⁷⁾。また、インフレーションも急速に進行した。73年6月から74年6月にかけての僅か1年間に、米の価格は89.3%、小麦の価格は133.2%、野菜の価格は53.8%、ミルクの価格は60.1%、魚の価格は162%も上昇した²⁸⁾。

このような状態の中から反政府の大衆運動が生じて来ることになった。ナーラーヤンがサルヴォダヤ運動を促進させていかなければならないと考えた背景には、このようにインドの民主主義が「全体主義的（totalitarian）」方向へと急速に傾斜していったという状況、国民の間に反政府気運が高まりつつあった状況があったのである。「全面革命」は、以上のような経緯の中から出て来たものでもあるため、ヴィノバの運動と違って、政府に「抵抗」する側面が強く打ち出されることになった。但し、ナーラーヤンが目指したのは、会議派に反対する野党による「政党の運動」ではなく、社会を活力のある新しいサルヴォダヤ運動により変革することであった。「全面革命」は、この文脈においても捉えなければならない。

さて、「全面革命」運動の時期は、一般的には、会議派政治の腐敗、経済政策の失敗をつく学生運動が活発になり始めた1974年3月頃から、ガンディー首相が非常事態宣言を発令し、ナーラーヤンを初めとする運動の重要な指導者が逮捕されるに至った1975年6月26日までとされている²⁹⁾。

以降、「全面革命」運動期の戦術、「全面革命」の理念の実践等を考察してみたい。

まず最初に「全面革命」の戦術であるが、それは、新しい革命勢力を反抗精神のある学生、理想を持った青年、都市の知識人から引き出すことであった。ヴィノバの運動は、農民への訴えかけが中心であり、それ故、今一つ大きな運動とはなり得なかった事実を踏まえ、ナーラーヤンは、インドの政治を事実上支えているといわれる知識階層に目をつけ、運動に広がりをもたらしとしたのである。ナーラーヤンは、教育の現状を批判していくことで、学生や知識人にもアピールする論理を見つけていったようである。即ち、それは、教育が、有利な職を得る

ための手段としての位置しか与えられていないこと³⁰⁾、教育は、「誠実、正直、年長者への尊敬」といった価値を育むようにはなっていないこと³¹⁾、教育が、権力者に都合のよい人間を供給するようになっていること³²⁾等である。

そして、ナーラーヤンは、学生に次のように呼び掛けている。

世界の幾つかの国では学生たちが、彼らの国の政治的運命を決めるのに決定的な役割を果たした。タイは、最近の例³³⁾である。今度は、インドの若い力が、人民の主権を確立し、人民が金権・虚偽・残忍な支配に打ち勝つようにするために決定的な役割を果たす時である³⁴⁾。

更に、知識人への呼び掛けも、次のように積極的になされている。

ナーラーヤンは、大学の教師や知識人に対して、運動の性格を人々が理解できるようにする手助けをしてほしいと訴えた。...「ビハール運動に関する全インド大学教師会議 (All-India Convention of the University Teachers on Bihar Movement)」で、ナーラーヤンは、教師らは、運動を体系的に理解する必要があると言った³⁵⁾。

では、実際に、学生らは、運動でどの程度活躍していたのであろうか。以下の記事には、当時の状況がよく表されている。

ビハールでは、「チャートラ・サンガルシュ・サミティー (Chatra Sangharsh Samithi 学生闘争委員会)」や「ジャン・サンガルシュ・サミティー (Jan Sangharsh Samithi 人民闘争委員会)」が、州の至る所にできている³⁶⁾。

たいていの村の人々は、ナーラーヤンと彼の運動を知っている。運動は、学生の動員に頼っている。... どの選挙区 (Assembly Constituency 州議会の選挙区) にも、学生の運動の拠点がある。... 会議派の人間たちがパンチャーヤトを牛耳っているところではどこでも、彼らに反対する勢力が、学生の影響によって、生まれようとしている³⁷⁾。

更には、国民会議派の長老の一人カーマラージの次のような発言もあった。

我が国の青年は、ガンディー思想に則った政府を設立する決意をしており、汚職、不正、失政に対する運動を起こした。... 青年は、公然と既存の秩序に反対している³⁸⁾。

以上の資料から判断する限り、「全面革命」運動では、学生や青年といった新しい勢力を動員することに成功していたことがわかる。このようなグループの参加は、ヴィノバの運動には見られなかったことである。知識階層に訴えることができた点に、ナーラーヤンの運動が、大きな盛り上がりを見せた一つの鍵があるものと思われる。

次に、「全面革命」の理念の実践について見てみたい。ナーラーヤンが、「全面革命」で目指したのは、政府に反対する野党による「政党の運動」ではなく、人間変革を通じて社会全体を活力のある新しいサルヴォダヤ運動により変革することであった。即ち、人民の自立、相互扶助等の理念を具現化する「人民の民主主義」の実現である。これは、政党の力によって上から

もたらされるべきものではなく、人民自らの自覚によってもたらされるべきものであった。そのために、1974 年 10 月には、「ジャナタ・サルカール (janata sarkar)」の設立が宣言された。これは、村落レベルに「人民の政府 (people's government)」を作るというものであった。ナーラーヤンのこの考え方は、「グラムダーン村落」と銘打ってはいても名ばかりのものが増えていったヴィノバの運動での反省の経験を踏まえ、一つ一つの「グラムダーン村落」を実体の伴ったものにしていくとの発想から出て来たものである。

では、具体的に、「ジャナタ・サルカール」の実態を見てみよう。

パルタ・ムケルジー³⁹⁾は、1975 年 6 月北部ビハールにあるサハラ県のラゴプルを訪れ、そこでの「ジャナタ・サルカール」の実践に関しての報告⁴⁰⁾を残している。

ラゴプルでは、1974 年の末或いは 1975 年の初めまでには「ジャナタ・サルカール」が出来上がっていた。その活動の幾つかは、以前からの成果を受け継いだものであったが、この時期に至って非常に大きな反響を得た。例えば、以前からのプログラムである「アダーラット・ムクティ(裁判所⁴¹⁾からの自由)」を継続したものである「ジャナタ・アダーラット(人民の裁判所)」が出来て、有効に機能した。1974 年 12 月までに 150 の事件が口頭で処理された。1974 年 12 月以後は、訴訟手続きが明確になり、告訴は書類を使って行われるようになった。「サンヨージャク(事務総長)」がそれを 7 人のメンバーより構成される「ニャーヤパーリカー(司法局)」へ渡し、紛争の当事者は「ニャーヤパーリカー」のメンバーと共に話し合った。もし、問題が未解決の時は、「サンヨージャク」やその他のメンバーにも諮られた。裁判は、事件が解決されるまで続いた。

「ジャナタ・アダーラット」以外では、11 人のメンバーよりなる「カーリヤパーリカー(行政局)」、5 人のメンバーよりなる「アルタ・サミティ(財政委員会)」があり、「サンヨージャク」がそれらの調整を行っていた。

1975 年 3 月 23 日、「ジャナタ・サルカール」は「料金統制表 (rate control chart)」を「ブロック発展局 (Block Development Office)」に出し、日用必需品の価格が定められた。その結果、数日の間、石炭やマッチのような必需品が出回らなかったが、それにもかかわらず「ジャナタ・サルカール」は、米や小麦の価格と供給を維持することができた。また、ネパールからの米のような密売品の押収が、「チャートラ・サンガルシュ・サミティー Chatra Sangharsh Samithi (CSS) (学生闘争委員会)」や「ジャン・サンガルシュ・サミティー Jan Sangharsh Samithi (JSS) (人民闘争委員会)」の自警団によって行われた。そのような物資は、所有者の前で公開市場で売られ、所有者にその取り分が直接手渡された。役人や小役人の汚職の風習は、嚴重にチェックされた。彼らは、その地域の政府の役所やその他のほとんどすべての施設に連絡する注目すべきコミュニケーション・ネットワークを時間をかけて完成することができた。地域でできた食料はまずその地域内で売られ、余剰のみを外で売ることが許された。

そして、「ジャナタ・サルカール」には自警委員会があり、商店が公正価格で食料を売るようにその行為を監視した。化学肥料の分配は、多くの場合 CSS によって管理された。以前は、

ディーゼルはポンプの所有者にのみ供給されたが、今や CSS の提案により、一定の期間ポンプを借りできる人々にも供給が許された。家屋を建設する際に援助をしたり、医療救助を行ったりしたこと等も報告されている。

ラゴプルでは、このように、話し合い、協力、公正等の倫理的価値の実現を目指しながらの自立・自治の運動が展開していた。

独立後インドにおける法定パンチャーヤトが、政府の強力な奨励と強制の政策により普及し⁴²⁾、上からの権力機構に組み込まれている性格を持つのに対し、「ジャナタ・サルカール」は、人民自らの自覚により下からの民主主義を実現しようとしていた点が異なると言える。

「ジャナタ・サルカール」の実践の様子に関しては、その他にも次のような報告が挙がっている。

ナーラーヤンは、7月末までに、ビハールの 300 ブロックにおいて「ジャナタ・サルカール」を設立する計画である。州首相のジャガンナート・ミシュラは、「私は、「ジャナタ・サルカール」を許さない。だが、それは既に存在しており、機能もしている。」と言ったとのことである。

ナーラーヤンの運動の成果の最たるものは、「人々の意識をこれまでにないほどに覚醒 (unprecedented awakening) させたこと」である。人々は、現状がどういう状態にあるのか、何をなすべきであるのかを知った。心理的変化 (psychological change) が、人々の中に起きた。

「ジャナタ・サルカール」は、人々を組織化することにも成功した。多くの村々に、

「ジャー・サンガルシュ・サミティー」が形成されたのである⁴³⁾。

(ビハール州の)ギリディ県のすべてのブロックにおける「ジャナタ・サルカール」の設立が、(来月の)7月末までに完了するであろう。

「ジャナタ・サルカール」は既に、ギリディ県の 18 ブロックのうち 15 ブロックにおいて設立された。「ジャナタ・サルカール」は、村人の間に肥料を配る等の活動をしている。村人の「ジャナタ・サルカール」に対する反応はよい⁴⁴⁾。

以上の史料から、「ジャナタ・サルカール」建設の動きは、単に理念にとどまることなく、少なくとも一定の広がりを持ったことが窺える。

さて「全面革命」運動は、以上のように、方法論の点、革新的な社会改革という点において注目すべき特徴を持ったものであった。では、次に第 III 章と第 IV 章で、フィールドワークによるインタビューと歌の分析を基に、「全面革命」運動の特質を更に追究していくことにしよう。

III. インタビュー調査

ナーラーヤンの運動に参加したサッチダーナンドへの 88 年 3 月 17 日のインタビュー調査は、運動の持っていた思想の特徴、運動の中で行われた実践、運動の残したものの、ナーラーヤンに惹き付けられた理由の 4 点を中心にしている。サッチダーナンドは、ナーラーヤンの第一

秘書 (first secretary) であり、新聞「インディアン・エクスプレス (Indian express)」で働いたジャーナリストであった。筆者がサッチダーナンドを選んだ理由は、以上のような経歴に加えて、ナーラーヤンと 30 年以上行動を共にしてきたということで、ナーラーヤンとの関わりが非常に深い人物であったためである。以下、質問 (Q) とそれに対する答 (A) という形式で述べることにする。

Q: 「全面革命」運動には、どんなユニークな点があるか?

A: 第一は、ヴィノバの運動と違い、闘争の側面を含んでいる点である。第二は、民主社会主義とは異なる点である。民主社会主義が国家権力を通じて社会主義国家を建設しようとするのに対して、「全面革命」は、人民の力を通じてサルヴォダヤ社会を建設しようとする。第三は、「全面革命」という語が表しているように、運動には様々な次元がある点である。即ち、政治的な次元では、人民が直接政治に参加することができ、権力を人民が直接握ることができるような完全な民主主義を目指すことであり、社会的な次元では、階級やカーストによる差別のない平等な社会を目指すことであり、経済的な次元では、現在少数の資本家の手に富が集中しているような状態をやめ、経済的分権化を目指すことであり、文化的な次元では、新しい文化形成を目指すことである。それは、人々を教育して汚職・相互協力の欠如・女性蔑視・迷信・カーストイズム・コミュニナリズム・サティー(= 寡婦殉死)等の悪習をなくすることである。

Q: 運動はどのように始められたか?

A: 運動は学生によって始められた。学生は、ナーラーヤンの思想に反応し、ナーラーヤンに指導を求めに行った。その時ナーラーヤンは民主主義を保護することは若者の義務であると言った。

Q: 1 年余り (1974 年 3 月—1975 年 6 月 26 日) の間に何が起こったのか?

A: 運動はパटनाから始まり他の町へ広まっていった。我々ワーカーも各地の村落に入り「ジャナタ・サルカール」の建設に取り掛かり始めた。ビハール州議会解散のための署名運動を行い、人々に運動の目的を説いて回った。都市や町、村々から非常に多くの署名が集まった。そのことは、人々がビハール州議会の解散を切望していることを示したといえる。我々若者たちは運動の社会的な面・経済的な面・文化的な面も説き続けた。幾つかのプログラムも実行された。例えば「(バラモンシンボルである) 聖紐を取れ」という運動があった。なぜなら、聖紐は社会的不平等の象徴であったからである。多くのバラモンがこれに従った。若いバラモンのみならず、年寄りのバラモンも反応を示した。ナーラーヤンの運動を通じていえることは、ナーラーヤンのカリスマもあるが思想自体が大衆にアピールしたということである。因にナーラーヤンは、とても正直で私心のない人間として人々に知られていた。「歌」の果たした役割も重要である。歌の内容は、「全面革命」についてであって、それが大衆を惹き付けた。

Q: ナーラーヤンの運動は終わってしまったが、それはどのような意味を残したのか?

A: ナーラーヤンの運動は終わったとは言えない。少なくともったとはいえナーラーヤンの影響を受けた人々はまだ戦っている。「チャートラ・ユヴァー・サンガルシュ・ヴァーヒニー

(Chatra Yuva Sangharsh Vahini 青年学生闘争隊)」は、今も残っている。また、ナーラーヤンの運動は民衆の力で社会を変革し、且つ民衆が平和裏に組織されうるということを示した。そして包括的な変化を志向し、そのことをワーカーが村に入り活動したりする中で実践しようと試みた。

Q: ナーラーヤンの運動に参加して感じたことは何か?

A: ナーラーヤンは、社会主義運動からヴィノバの運動へ、そして「全面革命」運動へと、論理的に一つずつ行動していった。ナーラーヤンのような遍歴を辿った人は誰もいない。ナーラーヤンの「全面革命」の思想は、長年の活動の成果であり、精神的な次元を考慮したものである。ガンディーは、「私の真理実験の物語 (The Story of My Experiments with Truth)」という自叙伝を書いたが、ナーラーヤンなら「私の革命実験の物語 (The Story of My Experiments with Revolution)」という自叙伝を書いたであろう。

Q: (サルヴォダヤの思想、及び「全面革命」の思想で説く内面変革の重要性はわかるが、インドの社会変革は、あまり進んでいないように思われる。それに対して)ソ連・中国は、インドと異なり大きな社会変革を成し遂げた(ように思われる)が、そのことをどう思うか?

A: ソ連・中国の変化は何を生み出したのか。ソ連では国家が民衆を抑圧しているし、中国では民衆がいまだに文化大革命を憎んでいる。社会システムは民衆が自由になるように変化すべきである。

Q: (人間の内面変革の指標として)ガンディーやナーラーヤンは「真理」に従えというが、「真理」が何を指すのかは人によって違ってきてしまうのではないか?

A: 「真理」は普遍的なものである。皆、自分の人生の中で「真理」とは何かがわかっていくものである。嘘をつくことはよくないとか殺生はよくないとか隣人を愛するべきであるとかである。

Q: なぜナーラーヤンに惹き付けられたのか?

A: 1942年、私がまだ学生だった頃ナーラーヤンのことについて聞いた。そして、ナーラーヤンの革命への呼び掛けに惹き付けられた。ガンディーは少ししか言わない人なので、その言わんとしていることがよくわからなかった。また、我々のような若者にはガンディーの資質もわからなかった。そんな時ナーラーヤンは非常に力強く映った。彼の社会主義の思想やカリスマ的な人格も訴えかけるところがあった。1946年以来、私は積極的に社会主義運動に加わり、次にサルヴォダヤ運動も彼と一緒に加わった。我々はガンディーを崇拝してはいたがナーラーヤンに従ったのである。ナーラーヤンはガンディーのカーボンコピーではないということを言っておきたい。ナーラーヤンにはガンディーと違い宗教的なものよりマルクス主義思想の背景が強くある。そのため知識人にわかりやすい社会科学的な言葉で訴えることができた。

以上がサッチダーナンダとのインタビューの内容である。本章冒頭で述べた4点に関して次のことが言えるであろう。まず、第一点の運動の持っていた思想の特徴では、人民自らの自立、自助を重視し、精神的な次元を強調していたことが言える。第二点の運動の中で行われた実践

では、ワーカーが各地の村落に入り「ジャナタ・サルカール」の建設に取り組んだこと、「聖紐をとれ」というバラモン自らの内にある差別意識をなくそうというバラモンの自己変革の運動が行われたこと等が挙げられる。第三点の運動の残したものでは、学生のボランティア組織の「チャートラ・ユヴァー・サンガルシュ・ヴァーヒニー」の存在がある。これは、運動の継承という意味において重要である。最後に第四点のナーラーヤンに惹き付けられた理由として、ナーラーヤンのカリスマ的な人格に惹かれた点もあるが、ナーラーヤンは、サッチダーナンダのような知識人にも納得のいく社会科学的な言葉で訴えることができた点を指摘できる。

IV. 運動の社会史的考察——歌の分析を中心にして——

この章では、「全面革命」運動期に歌われたヒンディー語の歌の分析を中心にして、運動の特質を更に探ってみることにしたい⁴⁵⁾。これらの歌は、筆者が88年3月11日ビハール州ガヤのグラーム・ニルマル・マンディルで、当時、「全面革命」運動に加わり、今もお社会改革運動に携わっている人々に歌ってもらったものである⁴⁶⁾。

1. 人は国と共にある。

人は尊厳を持って生きる。

私たちは今、国のあり方を変えなければならない。

死を恐れるような生は、生ではない。

人は悲しみに打ちひしがれたままではない。

人はいつか苦境から抜け出せるものだ。

一人の人間はまた全社会を変えることだってできる。

ああかわいそうな人たち、貧しい人たちよ。劣等感を捨てよ。あなたたちには力があるんだ。

私たちは今、国のあり方を変えなければならない。

今の悪い時代が国を荒廃させてしまった。

蛇の毒が至る所に広がってしまった。

大きな雲が太陽を覆っている。

私たちは、太陽の光を入れるために闇に穴をあけなければならない。

私たちは今、国のあり方を変えなければならない。

働く人たちよ、あなたたちはいつまでそのような状態にいるのか。

いつまで自分たちの力が奪われたままにいるのか。

大地、大空、大気、すべてはあなたたちのものだ。

庭、国、世界、すべてはあなたたちのものだ。

私たちは、インドを強欲な野望から救わなければならない。

私たちは今、国のあり方を変えなければならない。

2. 一緒にブーダーンの歌を歌おう。

一緒にブーダーンの歌を歌おう。

さあ土地から黄金を産み出そう。

さあ土地から黄金を産み出そう。
手に鋤を持って耕しながら歩こう。
手に鋤を持って耕しながら歩こう。
さあ土地から黄金を産み出そう。

3. 君たちが革命を支えていくんだ。
君たちが村から村へと回って革命を起こしていくんだ。
君たちが非暴力革命で国を救っていくんだ。
準備はいいか。もう一度、皆で「革命(インクラブ)」と叫ぼう。
君たちが革命を支えていくんだ。
4. ジャヤプラカーシュ(＝ナーラーヤン)の呼び声が聞かれる時、若者は目覚める。
革命があなたたち若者をすぐ目の前まで迎えに来ている。
誰が国の悪を正すために出て来るのだろうか。
山は近づく台風を止めることができるだろうか(できはしない)。
だとするなら、どうして銃が革命を止めることができるだろうか。
私たちににとって障害となっていたあらゆる力は破壊された。
革命があなたたち若者をすぐ目の前まで迎えに来ている。
注意なさい、兵士たちよ。あなたたちは道を変える必要はない。
あなたたちは、血の最後の一滴まで戦うべきだ。
こういった殉教者たちだけが国の誇りを保ってきた。
憂鬱が何十万もの人々の小屋を暗くしてしまっている。
百万長者は隣のバンガローで生活を楽しんでいる。
私たちは、これらの違いをなくそうと誓った。
革命があなたたち若者をすぐ目の前まで迎えに来ている。
5. 今日、娘を持つことは父親にとって負担だ。
見よ。この社会でどんなことが起こっているのか。
金貸しもまた利子を取ろうとしておどしている。
私たちは、このダウリ制度を壊すつもりだ。
...
父親は、多くの手間隙をかけて自分の娘を育ててきた。
6. 労働者と農民たちは共に革命を始めた。
私はあなたに要求している。土地をくれと。

以上、6つの歌を通していえるのは、次のようなことであろう。

まず、ヴィノバの影響であるが、2、6の歌には、ヴィノバのブーダーン運動による土地改革思想の影響が見られる。ナーラーヤンが、ブーダーン運動、グラームダーン運動の経験から、「ジャナタ・サルカール」設立の発想を導いていったことは、既に第Ⅱ章で触れた通りである。

ナーラーヤンとヴィノバとの一つの違いが、4の歌に表れている。4の歌では、(かつてのイ

インド民族運動の)殉教者たちをたたえ、かつての植民地本国イギリスに対する戦いを、悪しき中央政府への戦いに見立てている。悪に対する抵抗というガンディーの精神を独立後インドに復活させようとしたところが、ヴィノバとの違いの一つである。なお、4の歌からは、ナーラーヤンの持つカリスマ性も感じ取ることができよう。

更に、この運動には、社会の不正に対して闘っていくという社会改革重視の側面が強く見られる。5の歌には、インドの女性を厳しい立場に追い込んでいる悪習であるダウリ(=結婚持参金)制度への批判が見られる。

さて、1の歌の18-19行目を見ると、そこには私有権の否定の思想が表れている。だが、暴力に訴えることで私有権を否定しようとは歌っていない。自己の内なる力を発現することができた時(8-9行目、17行目)、私有権の否定、そして全社会を変える(7行目)ことへと繋がるのである。自己の内なる力=「精神力」を現出せしめることで、社会を変革することさえできるという思想は、ガンディー思想の流れを組むものである。そして、そのように自己の内なる力への信頼が、「全面革命」運動に参加した人々の支えとなっていた様子を、4-6行目等から窺うことができる。3の歌に見られるように運動を非暴力の力を信頼して進めていこうという思想もそのことの表れであろう。

V. 運動の変質

運動には、以上見てきたような特質があったのであるが、徐々に政府に反対する野党による「政党の運動」という性格が出て来るようになり、運動は、ナーラーヤンの理想とした方向から大きくずれてしまうことになった。これは一つには、野党の動員は運動にダイナミズムを与えるであろうし、野党自体も、運動に加わる中で「人民の運動 (people's movement)」と一体化すれば、党派的利害を脱却し、より人民の立場に接近するであろうとのナーラーヤンの判断のためであるが、結果的には、当初の目標である「政党によらない民主主義」を否定することになった。しかし、ナーラーヤンは出来るだけ「人民の運動」という路線を推し進めようとしたのであり、望んで野党の運動にしたのではなかった。以下そのような展開を見てみよう。

1974年8月、7党が連合してバールティーヤ・ローク・ダル (BLD; インド人民党)が結成された。ナーラーヤンは、この動きを歓迎しないわけではなかったが、党の連合に関しては次のような見解を抱いていた。

運動は、「人民の運動」であり、反対政党 (opposition party) の連合戦線の運動ではない。そのような運動の目標は何であるのか。言うまでもなくそれは、人民の要求の実現、搾取・抑圧・貧困・同様な多数の不正からの自由の実現である⁴⁷⁾。

74年11月、ナーラーヤンのイニシアティブにより、国民調整委員会 (National Coordination Committee) が設立された。これには後にジャナタ党となる勢力が含まれていた。しかし、ナーラーヤンは新党の指導者になることは次のように拒否した。

闘争は、権力の奪取のためではないし、会議派勢力を反対勢力に置き換えることでもない。反対勢力をも含めた政府・政治の純化である⁴⁸⁾。

だが、事態はこの後、反対政党の運動という性格を強めていった。なぜならば、政府への「抵抗」を行う必要はないと考えるヴィノバ派と、悪しき政府に対する「抵抗」が必要であるとするナーラーヤン派とに、無党派組織であるサルヴァ・セーヴァ・サング (Sarva Seva Sangh 全インド奉仕協会) が分裂した⁴⁹⁾ ことにより、ナーラーヤンは、サルヴァ・セーヴァ・サングにあまり頼ることができなくなった結果、政党にも頼らざるを得なくなってきたからであった。運動はこのように変質することで、「全面革命」の本来の理念から逸れてしまうことになった。

そして、11月18日、運動の転換点が訪れた。ナーラーヤンは、「学生闘争委員会」の要求の一つであるビハール州議会の解散問題を、次の選挙の結果により決着をつけようというインディラ・ガンディー首相からの挑戦を受け入れたのである。この背景には、権力側の増大する暴力に対して運動を平和的に保つために、民衆に当座の目標を設定することが必要であると踏んだことがあった。一方、選挙に勝利する目的のために、全面革命運動を利用しようとする野党の動きに対しては、ナーラーヤンは、この後、再三警告している。以下は、75年3月11日の発言である。

運動の目的は、選挙に勝利することでも、政府を(他の政府に)置き換えることでもない。それは、大衆を覚醒させ、望ましい方向に心を変革 (change of heart) することである⁵⁰⁾。

しかし、ここに、ナーラーヤンが野党勢力の指導者になることを強く期待される状況が生じた。即ち、ガンディー首相は71年4月24日、選挙法違反を理由として、野党のラージ・ナーラーインにより告訴されていたが、75年6月12日、アラーハーバード高裁で有罪判決が下された。6月18日には、グジャラート州で反会議派「ジャナタ・フランク」州政府が成立した。これらの結果、野党勢力は、ガンディー首相の支配を打ち倒すことができそうな絶好の機会を得たので、ナーラーヤンは野党勢力のシンボルとしての役割を演じることを期待され、ついに説得されてその指導者になることに同意した。

そして、6月23日、ナーラーヤンは集会に出席するためデリーに行くことになり、25日デリーで国民にガンディー政権打倒を訴えた。事態がここに至ってガンディー首相は、26日非常事態宣言を発令し、これにより「全面革命」の理想を追求する運動は終わった。以後、この運動の性格は、非常事態宣言以前の状況の回復を志向するという守勢のものに変化した。ナーラーヤンは、逮捕されチャンディーガルに拘禁された。

なお、ナーラーヤンは、健康状態が悪化したため、1975年11月12日に釈放された後、政府の厳しい監視のもとに置かれながらも、反政府的立場を貫き通した。そして、1977年1月18日、ガンディー首相により総選挙の実施が決定されると、ナーラーヤンは、反政府勢力の結集に奔走し、ついに1977年3月16-20日の総選挙で、インド独立以来、一貫して政権の座

にあった与党会議派政府を敗北させ、ジャナタ党の勝利へと導いたのであった。

結論 「全面革命」運動の歴史的意義

「全面革命」運動は、人間の内面変革を基本に置いた上で、社会改革を行っていかうというサルヴォダヤ運動の中に位置付けられるものであると同時に、そこでは、ガンディー、ヴィノバのサルヴォダヤ運動の経験を踏まえた上での独自の戦術と運動形態が構築されていた。

ナーラーヤンは、沈滞したヴィノバの運動を立て直すところから始めた。ナーラーヤンは、ヴィノバと違い、政府に「抵抗」する側面を強調すると同時に、それまでの村落中心の運動を都市へも拡大した。そして最も大きな特徴は、新しい革命勢力を、学生、青年、及び知識人から引き出したところにあったといえよう。ナーラーヤンはその際、教育の現状を批判していくことで、学生や知識人にもアピールする論理を見つけていった。即ち、教育が、有利な職を得るための手段としての位置しか与えられていないこと、教育が、権力者に都合のよい人間を供給するようになっていること等である。ナーラーヤンの運動は、学生、青年らの参加により、非常に大きな盛り上がりを見せることができたのである。

ナーラーヤンの理念、即ち、人民の自立、相互扶助等を目指す「ジャナタ・サルカール」の設立等の社会改革の理念は、どの程度実現されていたのであろうか。サッチダーナンドの話、パルタ・ムケルジーの報告、新聞の報道記事等からみて、実際にサルヴォダヤの活動家が村落に入り「ジャナタ・サルカール」の建設に取り組んだ事実はあったようである。北部ビハールにあるサハラ県のラゴプールのように、「ジャナタ・アダーラット(人民の法廷)」「カーリヤパーリカー(行政局)」、「アルタ・サミティ(財政委員会)」ができる等かなり具体的な成果が上がっていたところもあった。

その他の社会改革運動では、バラモンにあるエリート意識・差別意識をなくそうとする「聖紐を取れ」という運動が広まり、結婚におけるダウリの問題を批判したりした。また、学生のボランティア組織として「チャートラ・ユヴァー・サンガルシュ・ヴァーヒニー」が出来、今日まで続いていることは注目してよいであろう。

次に思想上の問題点を指摘してみたい。人間が変わらなければ根本的な問題は解決されないというナーラーヤンの発想が原理的には正しいとしても、その方法でインドの社会構造を短期間で目に見える形で変えることはできなかった。この観点から見れば、ナーラーヤンの運動は失敗である。だが、実際に運動に加わる中で自らに目覚め、自己を変革していった人々が多数生まれたことは確かである。後者の事実をどう見るかは議論が分かれる所でもあるが、この事実を等閑に付しては運動の持っていた大事な意味を理解することはできないであろう。

しかし、ここで更に考察を加えなければならないのは、ナーラーヤンの運動の上述の意味におけるような失敗は、思想上の問題にのみならず、インドの政治的風土そのものにもあるのではないかという点である。即ち、インドの政治的風土においては、政治学者モリス・ジョーンズによれば、政治の世界からある意味では離れたところにいると見られている「聖者」が大衆

から深い反応を引き出すことができるということである⁵¹⁾。インドの政治世界は、通常は、私利私欲にかられた政治家が、自己或いは狭いセクツ的な利害を身勝手に追求する面によって彩られているが、それと同時に、時折そこでは、自己犠牲の理想に駆り立てられた「聖者」が、民衆に対し実に献身的な奉仕行動をするという面も見られる。両者は実は同じコインの表裏の関係にある。通常政治世界において「前者」が一般的であるからこそ、人々は、まさにそれとは対照的な、後者の面を代表している「聖者」に惹き付けられるのである。換言すれば、「聖者」の存在は、前者の存在を前提として成り立ちうる。ナーラーヤンはガンディーやヴィノバと同様にそのような「聖者」の一人であった。人々は、ガンディーを、ヴィノバを、そしてナーラーヤンを、ある意味では神の化身のような人物として捉えながら、彼らを政治的、精神的な指導者と仰ぎ彼らに従ったのであった(人々がガンディーやナーラーヤンの中に、現実の生活上の不満を一気に解決してくれる存在としての意味を求めていたことも、そのことと関連している)。ナーラーヤンの運動がその大きさのわりには、いざ運動が終わってみると然程の成果を残すことができなかった理由は、人々が彼をそのような人物として見ていた点にあった(だが、またこのこと故に、ナーラーヤンの運動は多くの人々を動員することができたという事実は皮肉である)。ナーラーヤン自身がインドの人々に対し、「聖者」のような存在を必要としないくらいに政治的に成熟していることを望んだ時に、彼が、そのような人々により彼らにとっての「聖者」に選ばれたという矛盾、ナーラーヤンは、「ジャナタ・サルカール」の設立等の運動を、「人民の民主主義」を実現し人民の自立の理念を具現化するために行ったのだが、そのために他ならぬナーラーヤンその人のカリスマ的存在が必要不可欠とされたという矛盾がそこにはあった。そのような政治的風土の中で「人民の民主主義」を目指す動きが早急に「本物」となるわけもなく、ナーラーヤンが運動から退場するやいなや徐々に沈滞化してしまった所以である。

最後に、運動の崩壊理由と関連して述べなければならないのは、ナーラーヤンが真に革命的方向を追求するところまでは行かず、当時の情勢にある意味では流され、政府に反対する野党による「政党の運動」へと変えてしまった点である。この点に関しては、チャウリー・チャウラーで暴動が発生したことを理由に、第一次非暴力運動を断固として中止させたようなガンディーの資質との違いということも考えられるであろう。自立を目指すサルヴォダヤの観点からすれば、「ジャナタ・サルカール」において見られた草の根民主主義こそを粘り強く時間をかけて徹底していくべきであったといえよう。

ナーラーヤンは一貫して、下からの民主主義を説き、決して権力の座には就こうとせず、「権力政治」の外側からそれに影響を与えようとした。ナーラーヤンは、「全面革命」後、成立したジャナタ党政権に「1年与えよう」と言ったが、結局、権力者が会議派の政治家からジャナタ党の政治家へ変わっただけのものという性格が強く、民衆の期待を裏切ってしまった。サルヴォダヤの理念からすれば、草の根民主主義を実践していく中で「権力政治」を空洞化していくことが最も望ましかったのだが、それができないならば、「権力政治」を担う政権を交替さ

せることで満足せず、ナーラーヤン自身が権力に関わり、人民に好意的な政府を作っていくべきであったかもしれない。ナーラーヤンは、その何れの道にも徹することがなかった。

なお、ナーラーヤンの理念は最終的な成果をこそ見ることはできなかったが、ナーラーヤンがガンディーやヴィノバ等の先人の成果を踏まえた上で、サルヴォダヤ運動を時代の要請に合うように発展させてきたことを考えるならば、ナーラーヤンがもっと長生きしていた場合には、「全面革命」運動をも総括してサルヴォダヤ運動の更なる新しい可能性を切り開いていった可能性もあるだけに、ナーラーヤンが志半ばで逝ったことが悔やまれる。

補 「全面革命」によるジャナタ党政権誕生という政変劇がもたらした結果

「全面革命」によるジャナタ党政権誕生という政変劇は、結果的に、カースト間、宗教徒間、民族間の紛争を以前より激化させる引き金の一つになった。中でも、ヒンドゥー・ムスリムの対立は、終には独立後インド最大の宗教紛争と言われるまでになったアヨーディヤ事件(92年12月)を発生させるまでに至ったが、次に、このような宗教徒間の対立を含む様々な紛争の背景を考察してみたい。

ヒンドゥー・ムスリムの関係という観点から見ると、60年代末のそれも80年代以降に見られるそれと同様にかなり緊迫したものであった。当時のジャン・サング党(現在のBJP[インド人民党])は、インド・ムスリムはインドの外に宗教的・政治的アイデンティティーを持つコミュニティであると主張し、「インド・ムスリムをインド化せよ」というスローガンを掲げ、ヒンドゥー・コミュニズムを煽っていたからである。なお、ジャン・サング党は独立後その社会・経済的地位を向上させてきた中層カーストを重要な支持基盤にしていたため、ハリジャンとも対立していた。

他方、60年代後半に会議派がインディラ・ガンディー派と長老派に分裂し、モラルジ・デサイ等の長老派がジャン・サング党と接近すると、インディラ・ガンディーは、彼女の政治的基盤を確かなものにするために、左翼勢力に接近した。このような状況下、ジャン・サング党等の右翼勢力は、会議派長老派グループとともに、インディラ・ガンディーの左寄り路線に対抗するために、コミユナル騒動を起こす陰謀を企てた。そのような陰謀の例として、アーメダバード(69年)、ビヴァンディ(70年)、ジャルガオン(70年)でのコミユナル騒動があった。インディラ・ガンディーは、こうした騒動を左翼勢力の助力を得て沈静化させた。インディラ・ガンディーは、このようにコミュニナリスト勢力を攻撃することで、左翼勢力及びムスリムやハリジャンを味方に引き入れたのであった。総じて、70年代以降、インディラ・ガンディー政権にとってムスリム及びハリジャン票はその存続のために不可欠なものとなった。

さて、ここで先にも触れた、独立後その地位を向上させてきた中層カーストについて具体的に挙げるならば、それらは、レッディ(アーンドラ・プラデーシュ)、ヴォッカリガ(カルナータカ)、ラージプート、パテル(グジャラート)、マラータ(マハーラーシュトラ)、ヤーダヴ、ラージプート、ブーミーハール(UP)、ジャート(ハリヤーナー及びパンジャブ)等である。彼

らは、60年代から始まった緑の革命で、大きな役割を果たし、企業家農民層を形成すると同時に、都市にも移住した。そして、彼らは、より多くの官職を得るようになるとともに、産業界や商業界にも多数進出するようになっていった。彼らはこのようにして経済的な力をつけるようになるにつれて、今度は政治権力をも要求するようになったのである。

しかしながら、独立後の民主主義の展開とともに、ムスリムやハリジャン等も彼らの権利に目覚めていった。そして、ムスリムやハリジャンが政治的主張をするようになるにつれ、中層カースト・グループは彼らに反撃するために、彼らに対し、より攻撃的になっていったのである。

だが、インディラ・ガンディーは、70年代半ばまでは、ムスリムやハリジャン票に依存することによって安定した勢力を確保していたため、中層カーストにおもねる必要はなかった。この姿勢が変化する契機となったのは、皮肉にも、ナーラーヤンが指導した「全面革命」によるジャナタ党政権の成立であった。即ち、ジャナタ党は、ジャン・サング党をその重要なメンバーとしていたため、77年の総選挙で中層カースト(特に北部のそれ)の票を取り込むことができたのであるが、インディラ・ガンディーは、この選挙で大敗北を喫したことにより、ムスリムやハリジャン票のみならず、中層カーストにも支持を広げなければならないことを痛感し、中層カーストにも目を向け始めるようになったのである。

他方、中層カーストは、政治的発言力を増すにつれて、ますます他のコミュニティに対し排他的になっていった。ヒンドゥー社会内では、中層カーストとハリジャンの対立が激しくなった。グジャラート州では、81年、アーメダバードで、パテル(中層カースト)がワンカー(ハリジャン)に対し、マハーラーシュトラ州では、82年、マラトワダで、マラータ(中層カースト)がマハール(ハリジャン)に対し、コミューナル暴動を起こした。また、ワンカーもマハールも「留保制度」(＝公務員採用時あるいは公立学校入学時に、カースト別に一定の枠を設けて受け入れる制度)の政策を最大限に活用しようとしていたが、グジャラートでは、85年、パテルが「留保制度」反対のアジテーションを起こした。

また、更に注目すべきは、ヒンドゥー・ムスリムのコミューナル対立である。ジャン・サング党がジャナタ党政権誕生に貢献したことにより、中央政府や幾つかの州政府に確保とした地歩を得ることに成功したヒンドゥー・コミュニナリスト勢力は、一連のコミューナル暴動を開始し始めた。80年8月のムラダバードの暴動で数百人のムスリムが殺害された事件はその一例である。ムラダバードは、インド国外からも大きな需要のある美しい真鍮細工で有名な所であった。ムラダバードにおけるムスリムの大部分は、伝統的には、真鍮細工師であったが、70年代以降、彼らの中に企業家になり中東への輸出産業に従事する者が現れ始め、それまで取引を独占していたヒンドゥーの企業家の利害が脅かされるようになったことが暴動の原因であった。同様の暴動は、83年9-10月メールルートで、85年3月アーメダバードでも発生した。前者は、中層カーストのヤーダヴ、クルミーとムスリムとの間の衝突、後者は、中層カーストのパテルとムスリムとの間の衝突であった。また、VHP (Vishwa Hindu Parishad 世界ヒンドゥー会議)の

ようなヒンドゥー・コミュニナリスト組織は、その勢力拡大のため、大衆に自ら積極的にコミューナル感情を吹き込み始めた。その例として、81年、タミル・ナードゥ州のミーナークシプラム県で数人のハリジャンがイスラムに改宗した事件をわざわざ大々的に取り上げ、アラブ・マナーがそれに関係しているという宣伝を流した事例を挙げることができる。因に、以下は、VHPが、マハーラーシュトラ州で、コミューナル感情を吹き込む目的で配っていたビラに書かれていた文章からの引用である(そこでは、ヒンドゥー側がコミューナル暴動を引き起こしておきながら、ムスリム側がその首謀者であるかの如くに記されている)。

我が国で絶え間なく起こっている暴動の背後には、十分に計算された陰謀が隠されている。モロッコからマレーシアにかけての国々の中で、インドだけがムスリムが未だに少数派にとどまっている。それ故、政府の家族計画を受け入れずに多くの子供を産んだり、ヒンドゥー教徒をムスリムに改宗させたりする等ムスリム人口を増やそうとする努力が絶えずなされてきた。彼らは、インドの民主主義制度を利用して我が国でムスリム政府を打ち立てることを夢見ている。...彼らはアラブ諸国と同盟を結び、そのオイル・ダラーの力で、インドのムスリムを反国家的な存在にし、何らかの口実を見つけては暴動を引き起こそうとしたり、無知なハリジャンを煽動してカースト・ヒンドゥーと衝突させたりして、我が国に混乱を招き寄せようとしている。その目的は、8000万人のハリジャンをムスリムに改宗させて、現在インドにおける少数派であるムスリムを多数派にすることである⁵²⁾。

80年の総選挙で復権を遂げたインディラ・ガンディーは、その新たな政権維持のために、ヒンドゥー・コミュニナリスト組織の支援も必要とし、こうした状況を利用した。彼女はVHPの主張を擁護するようになり、83年、VHPによって行われた「ヒンドゥー統一行進(Ekatmata Yatra)」を支持する等した。実際、インディラ・ガンディーは、83年、ヒンドゥー・コミュニナリスト勢力の助力を得て、デリー市議会選挙に勝利したり、ジャンムー地域での州議席をすべて確保するという成果を上げた。彼女は、ジャンムーでの選挙キャンペーンでは、自らを「ヒンドゥーの救世主」として位置付けることさえしたのであった。このようなインディラ・ガンディーの姿勢は、ジャナタ党政権が誕生する以前の彼女の姿勢とは大きく異なっていた。

(なお、コミューナルな動きは、80年代後半になると更に顕著になった。86年には、インド刑事訴訟法125項の下で、イッダ(iddah 離婚後3か月の期間)の時期を過ぎてなお元の夫に扶養費の支払いを命じた最高裁の判決に、ムスリムの神学者及び指導者らが、ムスリム・コミュニティーの法はインドの法に拘束されないとして反対したことに対し、ヒンドゥー・コミューナル指導者は、マスコミをも動員して非難を浴びせた。更に、VHPは、北インドのアヨーディヤにおいて、モスクの建っている場所は、ラーマの誕生したヒンドゥー教の聖地であるとし、モスクはヒンドゥー寺院が破壊された後に建てられたのであるから、ヒンドゥー教徒の手に取り戻し、寺院を再建すべしであるとのキャンペーンを行い始めた。因に、これは終に92年12月アヨーディヤにおいて、狂信的なヒンドゥー教徒約1万人がモスクを破壊するという事件に発展した。そして、この事件が引き金になってたちまち各地で暴動が発生し、僅か1週間で全国の死者は1200人以上、重軽傷者は1万数千人にもなったのであった。)

ところで、ジャナタ党から政権奪還後のインディラ・ガンディーの政治的行動は、結果的に民族間紛争を激化させることにも繋がった。例えば、アッサム州では、77年の総選挙でインディラ・ガンディーの国民会議派が大敗した後、非国民会議派の政党が政権に返り咲いたが、80年の総選挙で勝利したインディラ・ガンディーは、非国民会議派州議会の切り崩し工作に着手したのである。この結果、アッサムでは、反政府闘争が勃発した。このような状況下、中央と地方の闘争を背景にして行われることになった83年の州議会選挙では、反国民会議派勢力がボイコットを表明していたこともあり、国民会議派の圧勝が確実視されていたが、インディラ・ガンディーは、勝利に万全を期すため、更に、アッサム州民(ヒンドゥー教徒)と折り合いの悪いベンガル人違法流入民(ムスリム)に選挙権を与え、ベンガル人票を味方につけて選挙に臨んだ。アッサムにおけるアッサム人とベンガル人との間の民族間紛争は、この選挙開票の最中に勃発したのであった。

他方、パンジャブ州では、シク教徒富農層の政治的代弁者となった政党アカリ・ダルが、77年の総選挙で国民会議派を破ったが、ここでも政権に復帰した国民会議派による地方議会工作が、アッサム州の場合と同様に進められた。そして、81年秋に行われた州議会選挙でアカリ・ダルは、国民会議派に破れてしまったのである。この時、シク教徒の権益擁護を政府に求めて立ち上がったのが、後に過激派と呼ばれるようになったアカリ・ダルの若手グループであった。過激派の中には、ピンドランワレ師を指導者とするグループのように、シク原理主義を掲げ、分離独立国「カリスターン」建国を主張して、暴力を行使し、テロに走るグループも登場した。頻発するテロに手を焼いたインディラ・ガンディーは、遂に84年6月、過激派が立て籠もるゴールデン・テンブルを武力制圧し、多数の死者を出した。なお、このことが災いして、同年10月、インディラ・ガンディーは、シク教徒により暗殺された。

以上により、「全面革命」によるジャナタ党政権誕生という政変劇が、ナーラーヤンの全く予期したところではなかったのだが、結果的に、カースト間、宗教徒間、民族間の紛争を以前より激化させるという事態を招いた一つの要因となったことが浮き彫りになった。

註

- 1) Jayaprakash Narayan, *Towards Revolution*, New Delhi, 1975, p. 17.
- 2) *Ibid.*, p. 18.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*, pp. 19–20.
- 5) Bimal Prasad (ed.), *A Revolutionary's Quest — Selected Writings of Jayaprakash Narayan* —, Oxford, 1980, p. XIII.
- 6) Jayaprakash Narayan, *op. cit.*, pp. 21–2.
- 7) *Ibid.*, pp. 16–7.
- 8) *Ibid.*, pp. 22–3.
- 9) Bimal Prasad (ed.), *op. cit.*, p. XXX.
- 10) *Ibid.*, p. XXXIII.
- 11) Jayaprakash Narayan, *op. cit.*, pp. 49–55.
- 12) ガンディーが提示したインド社会改革の実践綱領。不可触民差別の撤廃、村落産業の活性化、村落衛

- 生、基礎教育その他よりなる。
- 13) ガンディー思想の構造については、拙稿「1920年代インドのアーンドラ地方における反英非協力運動—ガンディーとの関係を中心に—」『史学雑誌』第96編第10号、67頁。
 - 14) Bhoodan ブーミー(土地)のダーン(布施)という意味で、地主が自発的に土地を布施することによって土地改革を行なおうとするものであった(津田元一郎『インドの心』日本評論社、1980年、75頁)。
 - 15) Gramdan グラームダーンにおいては、土地の所有権は村落共同体に移行する。だが、それは国家によってではなく、村人の意志によってである。村落共同体にはあらゆる権利が委託される。cf. Vinoba and Jayaprakash Narayan, *Gramdan for Gram-Swaraj*, Varanasi, 1967, p. 3.
 - 16) Jayaprakash Narayan, op. cit., pp. 66–7.
 - 17) Sarva Seva Sangh ガンディーの社会改革の思想を実践していくために1949年に創られた。cf. Geoffrey Ostergaard, *Gentle Anarchist*, Oxford, 1971, p. 6.
 - 18) Partha N. Mukherji, *Sarvodaya After Gandhi: Contradiction and Change*, Indian Statistical Institute, Calcutta, 1983, p. 28.
 - 19) ヴィノバは、「独立インドは、民主主義的であり、抵抗を伴うサティヤグラハを行う余地はほとんどない。」としていた。Geoffrey Ostergaard, 'The Ambiguous Strategy of JP's Last Phase' in David Selbourne (ed.), *In Theory and In Practice*, Oxford, 1985, p. 158.
 - 20) ヴィノバが現存するシステムには関与せずその外で代替的な社会をつくりそれを広げていこうとしていたのに対し、ナーラーヤンは現存するシステム内で不参加の方法を取りそれを内部から変えていこうとした。Ibid., p. 160.
 - 21) Jayaprakash Narayan, *Prison Diary*, Pune, 1977, pp. 91–2.
 - 22) Tilak ヒンドゥー教徒が顔の額につける丸い印。特に結婚した女性は髪の毛の分け目に赤い色素で筋をつけるが、これらは夫への献身を意味する。
 - 23) Dahez ヒンドゥーの女性は結婚の際持参金を持って行く。これが嫁に出す家族の大きな負担になっている。持参金制度はインドの近代化を阻む悪習として問題になっている。
 - 24) Jayaprakash Narayan, *Prison Diary*, pp. 41–43.
 - 25) Ibid., pp. 70–2.
 - 26) 中村平治『南アジア現代史 I インド』山川出版社、1977年、267–9頁。
 - 27) クルディップ・ナイヤル著、黒沢一晃訳『インド政治の解剖』、サイマル出版会、1979年、262頁。
 - 28) R. K. Barik, *Politics of the JP Movement*, New Delhi, 1977, p. 45.
 - 29) Lalan Tiwari, *Democracy and Dissent (A Case Study of the Bihar Movement — 1974–75)*, Delhi, 1987, p. 136; Geoffrey Ostergaard, 'The Ambiguous Strategy of JP's Last Phase' p. 172.
 - 30) Jayaprakash Narayan, *Towards Total Revolution*, Vol. 3, Bombay, 1978, p. 54.
 - 31) *Indian Nation*, 28 April 1974.
 - 32) Jayaprakash Narayan, *Towards Total Revolution*, Vol. 3, p. 54.
 - 33) タイの学生、知識人たちは、73年、軍政の腐敗の追及や新憲法制定の要求等の運動を起こした。特に、73年10月の憲法制定要求運動は、大規模で広範な人々の支持を得た一大国民運動となった(『東南アジア現代史』有斐閣選書、1982年、200頁)。
 - 34) Jayaprakash Narayan, *Towards Total Revolution*, Vol. 4, p. 45.
 - 35) *Indian Express*, 7 March 1975.
 - 36) *Amrit Bazar Patrika*, 29 September 1974.
 - 37) *Statesman*, 1 December 1974.
 - 38) *Indian Express*, 5 February 1975.
 - 39) 筆者は、88年2月11日にバルタ・ムケルジー教授から全面革命運動について3時間程お話を伺うことができた。デリーのインド統計学研究所 (Indian Statistical Institute) の社会学の教授である。
 - 40) Partha N. Mukherji, op. cit., pp. 51–4.
 - 41) この「裁判所」は、インド政府の司法機構下でのそれを指す。
 - 42) 深沢宏「西部インドにおける法定パンチャーヤトと協同組合」『アジア研究』20–2、60頁。
 - 43) *Indian Nation*, 5 May 1975.
 - 44) *Indian Nation*, 2 June 1975.

- 45) 本章での歌の訳出に当たっては、東大・デリー大交換留学生のナビン・パンダ氏に御協力頂いた。ここに心からの謝意を表したい。
- 46) 「海外通信 [INDIA] 3 月 28 日林明」『サルボダヤ』、日印サルボダヤ交友会、1988 年 5 月号 42 頁参照。
- 47) Jayaprakash Narayan, *Towards Total Revolution*, Vol. 4, p. 166.
- 48) Geoffrey Ostergaard, 'The Ambiguous Strategy of JP's Last Phase', p. 166.
- 49) Geoffrey Ostergaard, *Nonviolent Revolution in India*, New Delhi, 1985, pp. 150–217.
- 50) Indian Express, 13 March 1975.
- 51) W. H. Morris-Jones, 'India's Political Idioms' in C.H. Philips (ed.), *Politics and Society in India*, London, 1963.
- 52) Kumar Rupesinghe and Smitu Kothari, 'Ethnic conflicts in South Asia', in Kumar David and Santasilan Kadirgamar (eds.), *Ethnicity*, Hong Kong, 1989, p. 262.